



見返り美人を消せ

石井竜生
井原まなみ

角川書店

見返り美人を消せ

昭和六十年五月十日初版発行

著 者 石井竜生 井原まなみ

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三三

電話 営業部〇三一二三八一八五二

編集部〇三一二三八一八四五

振替口座東京三一一九五二〇八 一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

Printed in Japan

ISBN4-04-872413-4 C0093

郵模第530号 昭和60年4月17日



見返り美人を消せ／目次

1 序の舞

2 築地明石町

3 住吉詣しうぎ

4 出合い

5 守り犬

6 湖畔

7 見返り美人

8 インターチェンジ

9 忍び駒

10 釘隠し

11 婦人像

12 バラをもつ乙女

13 雨中湯帰り

14 宿木

セ

三

六

三六

四

三

七

五

九

二三

二八

四〇

五〇

六九

15	ポスト	一八
16	文読み	一九
17	打出の小槌	二〇
18	眼	二六
19	愛染	三四
20	髪	三五
21	もてなし	三五
22	指	二七
23	阿修羅	二九
24	太平楽	三〇
	受賞のことば	三八
	選評	三〇

装 幀 岡村元夫
切手イラストレーション
田中 満

図版 須藤隆夫
協力 財団法人日本郵趣協会

見返り美人を消せ

1 序の舞

「死ね、というのか、わたしに？」

受話器からもれる西野鋼造の声が、いっそう気色^{けしき}ばんだ。

「いや、わたしが首をつるだけではない。このままでは、全員が将棋倒しになってしまふんだぞ」

「でも、神崎先生は、そんな大人げないかたではないと思うんですけど……」

朝海雅子^{あさかい まさこ}がこたえると、西野の声がよいいとがった。

「だったら、あんたたち二人で、ベッドの中で話をつけてくれ。切手を献上できないのなら、さしあたり、生きた美人切手をよこせ、と教授はうそふいている」

「……………」

「あれは使用^{スティング}ずみの切手でございますので、とわたしが逃げを打ったら、女は未使用^{ノ・スティング}のまっさらよりは、消印^{スティング}つきのほうが、かえって味わい深くていいなどと……まったく、なにが生き神様の娘むこだ！ なまぐさ教授め。だいいち、四十にもなって切手集めに血道をあげるなど、大人のやることは思えない」

「あら、切手収集は、もともと高尚な大人の趣味ですよ」

「マニアというのは、自己顕示欲の強い一種の偏執狂で、幼児性を秘めているといったのは、あんたじゃないか！」

西野はすかさず反論したが、ふいに語調をやわらげ、

「それにしても、〈玉六のヨ〉とやらは、ほんとうに人を狂わすほどの珍品なのかね？」

相手を踊らせるためなら、硬軟両様どんなふうにも態度を変える海千山千の金融業者なのである。

口調が変ったからといって、安心はできない。

「実物をみた人がほとんどいないというくらい、の、郵趣家垂涎（ワイラクリストすいげん）の的ですから……」

雅子は相手を刺戟（しげき）しないよう、つとめて淡々とこたえる。

「明治七年、つまり一八七四年以後、四隅に桜の花を描いたカタカナいりの〈改良桜切手〉が発行されたんですが、このシリーズの未使用切手中、六錢切手でヨの字が刻まれているものは、俗に〈玉六のヨ〉と呼ばれ、日本では三、四枚しかない珍品なのです」

「三、四枚とは、つまり実数がつかめないという意味かね？」

「そのとおりです。ほかに、かな入りと和紙二十錢（い）、かななし和紙三十錢政府印刷赤味紫などと並んで、日本切手屈指の珍品とされています」

「すると、値も張るな？」

「最低でも、二千万円はするでしょうね」

「二千万!? たかがちっぽけな古紙一枚で……?」

西野はしばし言葉を失っていたが、思いなおしたようにせかせかと命じた。

「所有者の名を言いなさい。わたしが直談判（じくだんぱん）する」

「ムリですわ。それは営業上の秘密ですもの……なにより、正真正銘の玉六のヨと分った以上、絶対に手放したりする人ではありません」

「だったら、他から手にいれてくれ。金はなんとしてでも工面する」

「残念ですけど……」

朝海雅子は、受話器を耳に押しあてたまま、色白の顔を横にふった。

「枚数がつかめないということは、誰が秘蔵だれしているかよく分らないという意味でもあるんです。マニアの心理は矛盾むじこしていて、珍品の所有者であることを誇示する反面、人に知られて盗難どなんにあったり、手放すのを強要されたりすることを、極度に恐れます。あげく珍品であるほど、秘匿するようになるのです」

「だったら、なぜ神崎先生に鑑定を頼んだのだ？」

西野が、鋭く鋒先を変えた。相手の言い分の弱点をたちどころに見抜く、先天的な嗅覚きゅうかくを備えている。

「本物の玉六のヨかどうか、わたくしも自信がもてなかったものですから……切手博士として高名な神崎先生なら、まちがいないと思っただんです」

「しかし、結果はネコにかつおぶしだった……この二年間、やれ賛助金だ、月々の研究費だと、苦心さんたん、貢ぎにみついでいよいよ半年後には、学園の移転発表というところまでこぎつけたのに……」

西野は、ぐちっぽく小さな吐息をもらすと、こんどは妙にしんみりした口調でつづけた。

「とにかくあんたは、玉六のヨの所有者をひとりは知っている。なんとかして神崎コレクションへの譲渡を承諾させてくれないと、わたしの何億という投資、鷺津先生わしづの広大な原野、新人議員候補殿の当選、すべてが夢まぼろしと消えてしまうんだ……むろん、きみ自身の未来だってない。切手店の権利はわたしが押えているんだからね。破滅を避けたければ、手段を選ばず玉六のヨを入手する以外にはない……忘れないことだ」

充分に脅しをきかせて、西野は電話を切った。

クーラーのモーター音が、それまで停止していたかのように、雅子の耳^じをうった。目^め白^{しろ}通^とりを往きかう車の軋^しみが、窓ガラスを目につくつかぬほどにたえず震わせている。

九月にはいったのに、まだむし暑い夜がつづいていた。

朝海雅子は、冷房をきかせた細長い部屋を一瞥^{いちべつ}した。

社長室という表示を掲げてはいるが、西野第二ビル五階のサラリーローンの事務所に隣接したこの一室は、二坪ほどの物置き同然のつくりである。壁にそって大小の段ボールが積みあげられ、残る空間は、四個つきあわせた折りたたみ式の長テーブルが占めていた。そのテーブル上には、いくつもの小さいまとまりを造りながら、古切手が山づみになっている。

雅子は、同じテーブルの一隅におかれていたタバコを手にとったが、つかのま、黒地の外箱に浮きでた朱文字に眼をとめた。

この珍しいタバコをはじめ、とことん自分の好みにこだわって押し通してきた生活が、いま崩れ落ちようとしている……。

西野の言葉が単なる脅しに終わらないだろうことは、西野の庇護^{ひご}を受けてきた身として、よく知っていた。しかし、かりにいま、玉六のヨの所有者の名を明かしたとしたら、追いつめられた西野は、有無をいわさぬ暴力沙汰^{ざた}をふくめ、どんな暴挙に出ないともかぎらない。切手を愛し、切手に支えられて生きてきた自分の半生にかけて、それだけではどうしても阻止しなかった……。

もともと切手本来の価値からみれば、目前に山をなしている使用済み切手の一枚と、玉六のヨと、軽重はつけられないはずである。それに値がつき、差がひろがっていくのは、煎^{せん}じつめれば男たちの権勢欲ゆえではないのか？ しかも、その欲はとめどなく膨張していく。現に西野たちはいま、原野

を黄金の大地に変えようとして、狂奔しつづけている。

「夢は枯野を駆けめぐる、か……」

朝海雅子は低くつぶやくと、いつにない醒めた眼で切手の山を見すえていたが、つと手をのばして、さっと払った。瞬間、花道に降りそそぐ無数の紙吹雪のように、切手が、あたり一面に舞い散った……。

2 築地明石町

1

秋が深まって、戸外はまだ薄暗かった。メゾン・ミツムラはしんと寝静まっていた。カーテンの隙間からさしこんでくる明かりは、街灯の光である。

管理人の小山が、枕もとの目ざまし時計にいったん目をやったのは、十一月六日（日曜）の午前五時半だった。そのあと、うつらうつら蒲団のぬくもりをたのしんでいると、いきなりズンと、衝撃が骨ばった身体をつきぬけた。

ぎくつと息をとめ、耳をすました。そのまま静寂がもどった。一、二分がすぎ、またうとうと眠りに落ちかかったとき、

「しっかりとしてくださいッ……なにか言って！」

女のさけぶ声がきこえた。

朝っぱらからなにを騒いでいるのかと、舌うちして窓からのぞくと、芝生に人が倒れ、女がとりすがっていた。マンション東端にあたる一〇五号室のバルコニーの前である。

（事故だ！）

直感した小山は、とっさに襦袢どてらをつかむと、寝巻がわりのメリヤスシャツ姿のまま、管理入室をとびだした。走りよると、さっきの女が呆然ぼうぜんとつたつていた。和服姿の胸もとを両手で抱えこみ、身体をこわばらせている。

「あんた、四〇五号の……」

つい一か月前、四階に人居した朝海雅子だった。三十歳はこしているが、どこか初ういしさを残したひとり暮らしの女である。

倒れていたのは、灰色の作業服をきた見なれぬ男だった。芝草を抱くようにつつぷしている。

「どうしたんです、あんたッ」

抱きおこそうとして、小山はびくつと手を放した。

男の首が、ひねられた鶏の首のようにぐにゃつと折れ曲がつたからである。目をこらすと、後頭部がひしゃげ、短く刈った髪の毛のあいだから首筋へと血がしたたつていた。

その首にのしかかるように、白い大きな花鉢フラワーポットが転がっていた。鮮血が、あたりの芝生にも点でんと散っている……と見えたのは、はじけとんだ小菊の花だった。

「ぶつかつたはずみで、鉢が落ちちゃつたの……まさか人に当たるなんて……」

ひきつった顔で女がいった。

小山は、反射的に女の部屋をふりあおいだ。そしてハッと身をよじつた。黒い丸鉢がまた一個、いまにも落下してくるかのように見えたのだ。

それが、四〇五号室のバルコニーから覗のぞいている男の顔だとわかつたのは、一呼吸のちだった。

「は、はやく、救急車を呼びなッ」

小山自身、ようやく我に返ってどなつたが、女はまだ安心していて身じろぎもしない。

「しょうがねえな、ほんとに」

苦い顔で小山がバルコニーをふりあおぐと、もう男の顔は消えていた。

みずから管理人室にとって返した小山が、夢中で連絡を終え、再び玄関ホールにとびだすと、朝海雅子とすれちがった。酔漢のようなおぼつかない足どりで、エレベーターのほうへ歩いていく。

「どこ行くんです、怪我人ほっといてッ」

小山がとがった声で呼ぶと、

「すみません。でも、わたくし、こんな恰好では……」

女は上体をひねって見返り、哀願するようなまなざしをむけた。

さつき和服とみえたのは、小紋風に連続模様の花柄をあしらった小豆色の浴衣だった。細身の伊達巻をきちんとしめていたため、寝巻とは気づかなかったのである。やや乱れた襟もとから白い素肌がのぞき、なだらかに盛りあがっていく胸の頂きが透けてみえそうだ。

「そりゃ、まア、まづいな」

年がいくもなく目をしばたくと、小山は玄関口へむかった。エレベーターの開扉音が背後でチンとひびいた。

芝生に倒れた男は、うめき声ひとつたてず、同じ姿勢で横たわっていた。

（助からんかな？）

素人眼にも、不吉な予感がした。

肩幅の広い、がっちりした体格の男だが、自分とさして変らない六十五、六の年にみえる。服装からすると、この明町界隈の工場関係者かもしれない。

救急車のサイレンはまだ聞こえてこなかった。女も着がえに手間どっているようだ……。